

沼

沼ハ、ヌマト云フ、ヌマトハ、水底泥濘アリテ黏滑ナルノ意、湖トハ其義固ヨリ異ナレドモ、其大ナルモノニ至リテハ亦湖ト稱スルモアリ、而シテ沼ヲ開拓セシ事ハ、政治部開墾篇ニ在リ、

名稱

〔倭名類聚抄一海〕沼 唐韻云、沼池也、之詔反和名 奴萬

〔箋注倭名類聚抄水〕廣本少作詔、按之少與廣韻合、在上聲三十少、詔在去聲三十五、笑、作詔誤、曲直瀬本奴下有麻字、刻版本同、按古事記、天沼矛、日本紀作天之瓊矛、訓注、瓊此云努、古事記、綏靖天皇御名沼河耳、敏達天皇御名沼名倉、其他沼名木之入日賣、沼羽田之入毘賣、沼代郎女、日本紀皆作淳、日本紀天武天皇御名淳中原、訓注、淳中此云農難、越後國頸城郡沼川郷、讀奴乃加波、皆可以證沼之訓奴、又古事記應神天皇段云、新羅國有一沼、名謂阿具奴摩、萬葉集云、奴麻布多都、伊可保乃奴麻、可保夜我奴麻、伊奈良能奴麻、新撰字鏡、淇波並訓奴万、然則沼訓奴麻、古皆有之、然山田本、尾張本、昌平本、下總本、皆無麻字、與舊同、伊勢廣本、那波本亦同、則源君訓奴不訓奴麻也、淺人知奴麻之名、不知古或單稱奴、妄意增麻字也、不可從、按奴謂黏滑、言沼者水底有泥黏滑也、古事記云、五瀬命於御手負、登美毘古之痛矢串、到血沼海、洗其御手之血、故謂血沼海也、血沼者謂血之在皮上黏滑、今俗呼乃利、乃利、與粘同訓、又黏滑之義、是血沼之沼借字、非池沼之義、蓋滑也、沼也、粘也、黏也、奈爾奴禰乃通音、皆同語也。○中 廣韻同、按池沼也、猶言池沼之池、說文沼池也、詩召南毛傳同、

〔八雲御抄三上〕沼 ぬまといふは、池のつゝ、みのかくれぬとも云り、かくれぬは草にかくれたる也、たゝぬまといふは、水のたまりたるなり、

〔東雅二地輿〕沼ヌマ 義不詳、古語には、ヌとのみ云ひしなり、萬葉集抄に、ヌマとは水の流れぬをいふといひけり、されど古事記に、彥五瀬命の登美毘古の痛矢串を負ひ給ひ、其御手の血を洗ひ給